

令和4年度
埼玉学園大学大学院
子ども教育学研究科 **FD** 活動報告書

令和5年6月14日
子ども教育学研究科
F D 委 員 会

目 次

1	はじめに	1
2	FD活動に関する基本方針	
2-1	FD委員会の委員構成	2
2-2	FD委員会の開催日及び議題	2
3	子ども教育学研究科教育体制	
3-1	教育方針（ポリシー）	3
3-2	研究科長による3ポリシーの検証	4
3-3	教育実施体制	5
4	授業アンケート・授業報告	
4-1	授業アンケート実施概要	12
4-2	教員の授業報告	13
5	研究発表会及び意見交換会	
5-1	研究発表会	27
5-2	大学院専任教員と客員教員及び大学院生による意見交換会	27
5-3	専任教員と客員教員による意見交換会	27
6	論文審査について	
6-1	修士論文中間報告会	28
6-2	学位論文発表会及び最終試験	29
7	おわりに	29
参考資料		
1	埼玉学園大学大学院FD委員会規程	30
2	学生向け授業に関するアンケート実施のお願い（様式）	31
3	授業についてのアンケート（様式）	32
4	教員の授業報告（様式）	33
5	中間報告会の振り返り（様式）	34

1 はじめに

埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科は、平成 27 年度に開設された。その目的は、教育の理論と実践を往還しながら、自らの教育実践理論を構築できる資質と力量をもつ人材の養成であり、将来スクールリーダーとして活躍できる高度な専門的知識と技術を修得した人材の養成である。これは、本学の教育理念である「広く社会に貢献できる人材を養成」に沿うものである。

設置後第 8 年度が終了した段階で、子ども教育学研究科における大学院教育が当初の教育目標を十分達成されたかどうかを検証し、もし不十分な点があれば早急に改善を図ることにより、同研究科の教育をより充実したものにするために、令和 4 年度埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科 F D 活動報告書を作成した。

2 FD活動に関する基本方針

子ども教育学研究科におけるFD委員会の基本方針と役割、FD委員会規程については、当初の通りで変更はない。(参考資料1)

令和4年度のFD委員会の構成員は、以下の通りである。

2-1 FD委員会の委員構成

委員等	所属・職名	氏名
委員長	FD委員長	堀田 正央
委員	子ども教育学研究科講師	石橋 優美
委員	子ども教育学研究科講師	佐内 信之
委員	子ども教育学研究科講師	堀田 諭
委員	子ども教育学研究科客員教員	久保田善彦

2-2 FD委員会の開催日及び議題

FD委員会の開催日及び議題

令和4年度に開催された委員会の日時と議題は以下の通りである。

【令和4年度】

開催日	議題
令和4年 7月13日	(1) 令和4年度研究発表会の実施について (2) 令和4年度教育研究に関する意見交換会の実施について (3) 令和3年度FD活動報告書について
令和4年 11月9日	(1) 令和4年度研究発表会の報告について (2) 令和4年度意見交換会の報告について
令和5年 2月8日	(1) 令和5年度のFD活動について

3 子ども教育学研究科教育体制

3-1 教育方針（ポリシー）

【子ども教育学研究科修士課程】

I. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

子ども教育学研究科では、学校教育において複雑化・多様化する社会背景のもとに顕在化する多様な学校教育課題に教育学的内容知識を基に課題を正確にとらえ分析し、解決方策を構築し、それを実践知力まで高め、その実践結果を評価・改善し、理論化するという研究能力と実践理論を身につけた人材の養成を目的とします。このため、学位授与のためには、次のような条件を満たす必要があります。

1. 本学の教育課程において所定の単位を修得し、以下に示す教育研究及び教育実践力を修得したと判定されること。
 - ① 教育実践の省察をもとに、主体的・継続的に学び続け、自らの教育実践理論を構築することができる力量
 - ② 教職員と協働して学校組織における教育活動を活性化させる協働力
2. 本学の教育課程において教育課題の解決に関する理論的探究と実践的研究を行い、修士論文としてまとめ口頭試問に合格すること

II. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

1. カリキュラムの編成

子ども教育学研究科では、教育に関する専門的知識や専門職としての資質・能力の向上を図り、保育・教育の創造に主体的に取り組むことのできる実践的力量を有する人材を育成するために「理論を学ぶ科目」「理論と実践を往還する科目」「自らの教育実践理論を構築する科目」を構造化し、有機的関連を図ったカリキュラムを編成しています。

2. 教育の実施体制

各授業科目を担う教員が子ども教育学における教育・研究の使命をもち、保育・教育における高度な知識と実践的力量について互いに共有し、協働体制のもと教育を進めます。

3. 教育の評価

各授業科目は本学の理念・目的に沿った目標を定め、到達目標並びに評価の基準・方法を学生に周知し、成績評価を行います。また、FD委員会、研究発表会を定期的を開催し、学生による授業評価の結果をもとにカリキュラムの評価・改善を図り、教育の質保証をします。

III. 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

子ども教育学研究科では、「自立と共生」を理念に豊かな教養と子供に対する深い愛情と保育・教育に対する強い使命感をもち、高度な専門的知識と教育実践的力量を有する人材の養成を目指します。そこで、次のような能力・意欲・適性を持った学生を求めます。

- ① 学部段階で培われた資質能力をもとに保育・教育に関する研究に意欲的に取り組もうとする者。
- ② 学校や地域において指導的役割を遂行できるスクールリーダーとなることを志向し、高度な実践力を修得しようとする者。

本研究科は、研究奨励目的に成績優秀な学生に選考により、最大2年間にわたり、返還のない奨学金制度を備えています。

3-2 研究科長による3ポリシーの検証

I. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

ディプロマ・ポリシーにおいて示された“自らの教育実践理論を構築することができる力量”および“教育活動を活性化させる協働力”は不易流行が求められる社会背景において益々重要なものとなっている。前者においては各特論を始めとした講義科目、後者では本研究科の特色であるチーム・ティーチングによる演習科目によって、2年間を通じて培うことができていると考える。直近の修了生では教員や他学生との協働によって多くの知見を得、修士論文のテーマを大幅に変更したケースが見られたが、一定の教育実践理論の構築に至ったものと判断されている。令和2年度より修士論文作成のための教育課題研究の科目を増加し、1年次春期から、より長期視野で論文作成に取り組むことが可能となったが、その成果は令和4年度の修士論文にも表れている。今後もカリキュラム・ポリシーとの整合性をとりながら、より高い教育の成果の質を担保するための評価・改善を継続していきたいと考える。

II. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

教育分野は教養教育と専門教育の複合性が高く、職業的専門性と学問的専門性が密接していることから、各科目の目的が逆説的に見えにくくなる場合が考えられる。本研究科においては各科目がどのような目的でどのような資質・能力を養うものであるのかを明示するために、「理論を学ぶ科目」、「理論と実践を往還する科目」、「自らの教育実践理論を構築する科目」としてカリキュラムを構造化し、学生/教員が学びの成果を確認しやすい教育課程を編成している。特に理論と実践の往還の観点からは、各学校をはじめとした地域連携等が必要不可欠であるが、新型コロナウイルスへの対応の変化も見えてくる中で、従前通りとまではいかないものの、一部の授業において教育現場での実践を織り込むことができた。コロナ禍に限らずさまざまな外的理由により連携が難しくなる可能性はあり得ることを勘案すれば、今後も引き続きさまざまな回路を維持・発展させていくことが必要であると考えられる。

III. 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

“保育・教育に関する研究に意欲的に取り組もうとする者”、“スクールリーダーとなることを志向し、高度な実践力を修得しようとする者”の2点を意識し、入学者選抜においても教師としての展望と研究計画の内容を重視した。令和4年度の入学者は内部から2名、令和5年度入学予定者は内部受験者から1名で、両年とも外部受験者はなかった。教育現場におけるダイバーシティ・マネジメントの必要性の観点からも、多様な背景に基づいた学部以前の学びを持った学生同士は、より有益な相互作用が期待できる。入学/進学者にはスクールリーダーへの志向と研究への十分な資質・能力を持ちながら、主体的かつ積極的に取り組む姿が見られており、アドミッション・ポリシーが適切に機能したと評価している。本研究科では、令和3年度に外国人学生を入学させているが、今後入学希望者の多様化が更に進むことが予測され、アドミッション・ポリシーを遵守しながら公正な受け入れ態勢を整えることが課題である。

3-3 教育実施体制

令和4年度は、専任教員及び客員教員を併せて、18名の教員で授業・研究指導を行った。それぞれの詳細は、次の通りである。

3-3-1 専任教員

No.	氏名	職位	学位
1	吉野 剛弘	教授	博士(教育学)
2	長友 大幸	教授	博士(学術)
3	増南 太志	教授	博士(行動科学)
4	森本 昭宏	教授	教育学修士
5	川喜田昌代	准教授	修士(人間科学)
6	杉浦 浩美	教授	博士(社会学)
7	堀田 正央	教授	修士(保健学)
8	石橋 優美	講師	修士(教育学)
9	佐内 信之	講師	修士(教育学)
10	堀田 諭	講師	修士(教育学)
11	杉野 裕子	教授	博士(教育学)
12	千崎 美恵	講師	博士(心理学)

合計 12 名

3-3-2 客員教員

No.	氏名	職位	学位
1	久保田善彦	教授	博士(学校教育学)
2	葉養 正明	教授	修士(教育学)
3	森田 裕介	教授	博士(学術)
4	中本 敬子	准教授	博士(文学)
5	細川 太輔	准教授	博士(教育学)
6	神戸 佳子	講師	修士(教育学)

合計 6 名

3-3-3 担当授業科目・研究指導

各教員の担当授業は、下記の通りである。

埼玉学園大学大学院 子ども教育学研究科修士課程 授業科目及び担当教員

科目区分	科目名	担当教員
子ども教育学講義科目	子ども教育学基盤科目	教育人間学特論 吉野 剛弘 子ども発達特論 千崎 美恵 学習心理学特論 中本 敬子 発達障害支援特論 増南 太志 子どもと家庭支援特論 杉浦 浩美 学校マネジメント特論 葉養 正明 多文化子ども教育特論 堀田 正央 教育方法学特論 石橋 優美 教育実践研究特論 — カリキュラム開発特論 久保田善彦 教育メディア特論 森田 裕介
	関連科目・保育内容	子どもの言葉特論 佐内 信之 子どもの数・図形概念特論 杉野 裕子 子どもの科学認識特論 長友 大幸 子どもの造形表現特論 森本 昭宏 子どもと道徳特論 堀田 諭
子ども教育学演習科目	小学校授業実践演習 幼稚園教育実践演習 教材・環境開発演習 いじめ・自殺・不登校問題演習 地域連携プロジェクト演習	佐内 信之/杉野 裕子 川喜田昌代/千崎 美恵 長友 大幸/森本 昭宏 吉野 剛弘/増南 太志 杉浦 浩美/堀田 正央
研究指導	教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	吉野 剛弘/長友 大幸/増南 太志/ 川喜田昌代/杉浦 浩美/堀田 正央/ 石橋 優美/佐内 信之/堀田 諭/ 杉野 裕子/千崎 美恵

3-3-4 カリキュラム

本研究科の教育課程の具体的目標は、高度な教育理論と実践的な教育方法を培い、現代の教育におけるさまざまな問題を解決する教育実践理論の構築と、質の高いコミュニケーション能力により教育活動や課題解決に向け協働できる人材の養成である。

これらの目的を達成するために、「子ども教育学講義科目群」、「子ども教育学演習科目群」、「研究指導」の3科目群で教育課程を編成した。「子ども教育学講義科目群」は、「子ども教育学基盤科目」と「教科・保育内容関連科目」から構成している。具体的な編成は以下の通りである。

【教育課程の概要 子ども教育学研究科 修士課程】

学位又は称号	修士（教育学）	学位又は研究科の分野	教育学関係
卒業要件及び履修方法		授業時間等	
「子ども教育学講義科目」の「子ども教育学基盤科目（11科目・22単位）」のうちから4科目8単位以上を選択必修、「教科・保育内容関連科目（5科目・10単位）」のうちから2科目4単位以上を選択必修。「子ども教育学演習科目（5科目・10単位）」のうち「小学校授業実践演習（2単位）」及び「幼稚園教育実践演習（2単位）」を必修科目とし、2科目4単位以上を修得。「研究指導（3科目・6単位）」6単位必修とし、合計で30単位以上を修得し、かつ、修士論文を提出しその審査及び最終試験に合格すること。		1学年の学期区分	2学期
		1学期の授業期間	15週
		1時限の授業時間	90分

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験実習
子ども教育学講義科目	教育人間学特論	1		2		○		
	子ども発達特論	1		2		○		
	学習心理学特論	1		2		○		
	発達障害支援特論	1		2		○		
	子どもと家庭支援特論	2		2		○		
	学校マネジメント特論	2		2		○		
	多文化子ども教育特論	2		2		○		
	教育方法学特論	1		2		○		
	教育実践研究特論	1		2		○		
	カリキュラム開発特論	1		2		○		
	教育メディア特論	2		2		○		
教科・保育内容関連科目	子どもの言葉特論	1		2		○		
	子どもの数・図形概念特論	1		2		○		
	子どもの科学認識特論	1		2		○		
	子どもの造形表現特論	1		2		○		
	子どもと道徳特論	1		2		○		
子ども教育学演習科目	小学校授業実践演習	1	2				○	
	幼稚園教育実践演習	1	2				○	
	教材・環境開発演習	2		2			○	
	いじめ・自殺・不登校問題演習	2		2			○	
	地域連携プロジェクト演習	2		2			○	
研究指導	教育課題研究Ⅰ	1	2				○	
	教育課題研究Ⅱ	1	2				○	
	教育課題研究Ⅲ	2	2				○	
	教育課題研究Ⅳ	2		2			○	

3-3-5 時間割表

令和4年度 埼玉学園大学大学院 子ども教育学研究科時間割表

【春期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
1限 9:00 ～ 10:30															
2限 10:40 ～ 12:10	学校マネジメント特論	葉養 正明	312				教育課題研究Ⅰ	堀田 正央					子ども発達特論	千崎 美恵	312
							教育課題研究Ⅲ	堀田 正央 佐内 信之							
3限 13:00 ～ 14:30	子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	312	多文化子ども教育特論	堀田 正央	312									
4限 14:40 ～ 16:10										子どもの言葉特論（幼稚園） 火5小学校と併せて講義	佐内 信之	—			
5限 16:20 ～ 17:50				子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之	312				小学校授業実践演習	佐内 信之 杉野 裕子	312			
6限 18:10 ～ 19:40										教材・環境開発演習	長友 大幸 森本 昭宏	312 図工室			

集中講義

科目名	担当者	教室	日	程
カリキュラム開発特論	久保田善彦	312	8/29・30・31の1～4時限、9/1の1～3時限	
学習心理学特論	中本 敬子	312	9/2・5・6の1～4時限、9/8の1～3時限	

【秋期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
1限 9:00 ～ 10:30				子どもと道徳特論	堀田 諭	311	地域連携プロジェクト演習	堀田 正央 杉浦 浩美	310						
2限 10:40 ～ 12:10							教育人間学特論	吉野 剛弘	408	子どもの環境特論	長友 大幸	411			
3限 13:00 ～ 14:30				子どもの数・図形概念特論	杉野 裕子	312									
4限 14:40 ～ 16:10				発達障害支援特論	増南 太志	406				幼稚園教育実践演習	川喜田昌代 千崎 美恵	411	教育方法学特論	石橋 優美	312
5限 16:20 ～ 17:50										子どもの造形表現特論	森本 昭宏	図工室			
6限 18:10 ～ 19:40										子どもの科学認識特論	長友 大幸	312			

1) 「教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

3-3-6 院生数

今年度（令和4年5月1日現在）本学大学院に在籍する院生の詳細は、以下の通りである

総数、入試形態別人数、年齢別人数、男女別人数

① 総数 4名

② 入試形態別人数（名）

	一般選抜	学内選抜
修士課程1年	-	2
修士課程2年	1	1

③ 年齢別人数（名）

	22歳～25歳	26歳～30歳	31歳～35歳	36歳～40歳	41歳～
修士課程1年	2	-	-	-	-
修士課程2年	2	-	-	-	-

④ 男女別人数（名）

	男性	女性
修士課程1年	1	1
修士課程2年	1	1

3-3-7 研究題目一覧

<修士課程1年>

- ・学童期の学力格差の現状と課題
- ・子どもの知的好奇心を育む・引き出す為の保育者の良質な関わり方

<修士課程2年>

- ・外国人幼児が所属する園と家庭との連携のデジタル化
-日本における中国人の保護者に着目して-
- ・小学校道徳科の検定教科書における教材分析
-情報モラル概念を用いて-

3-3-8 履修状況

履修状況及び定期試験実施方法は、次の通りである。

【春期】

科目名	担当者	受講者数
子ども発達特論	千崎 美恵	2
学習心理学特論	中本 敬子	2
学校マネジメント特論	葉養 正明	2
多文化子ども教育特論	堀田 正央	2
カリキュラム開発特論	久保田善彦	2
子どもの言葉特論（幼稚園）	佐内 信之	1
子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之	1
小学校授業実践演習	佐内 信之/杉野 裕子	2
教材・環境開発演習	長友 大幸/森本 昭宏	2
教育課題研究Ⅲ	堀田 正央	1
	佐内 信之	1
教育課題研究Ⅰ	吉野 剛弘	1
	堀田 正央	1

【秋期】

科目名	担当者	受講者数
発達障害支援特論	増南 太志	2
教育方法学特論	石橋 優美	2
子どもの科学認識特論	長友 大幸	1
子どもの造形表現特論	森本 昭宏	2
子どもと道徳特論	堀田 諭	1
子どもの環境特論	長友 大幸	1
幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/千崎 美恵	2
教育課題研究Ⅱ	吉野 剛弘	1
	堀田 正央	1
教育課題研究Ⅳ	堀田 正央	1
	佐内 信之	1

3-3-9 定期試験

【春期】

科目名	担当者	試験内容
子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之	レポート
子どもの言葉特論（幼稚園）	佐内 信之	レポート
小学校授業実践演習	佐内 信之/杉野 裕子	レポート
子ども発達特論	千崎 美恵	レポート
学校マネジメント特論	葉養 正明	レポート
多文化子ども教育特論	堀田 正央	レポート
教材・環境開発演習	長友 大幸/森本 昭宏	レポート

【秋期】

科目名	担当者	試験内容
子どもの科学認識特論	長友 大幸	レポート
子どもの環境特論	長友 大幸	レポート
子どもと道徳特論	堀田 諭	レポート
子どもの造形表現特論	森本 昭宏	レポート
教育方法学特論	石橋 優美	レポート
発達障害支援特論	増南 太志	レポート
幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/千崎 美恵	レポート

4 授業アンケート・授業報告

4-1 授業アンケート実施概要

令和4年度春期における授業を対象として7月に、秋期における授業を対象として12月に、院生への授業アンケートを実施した。対象科目は2名以上の講義科目である。

実施時期

春学期：令和4年6月27日（月）～ 7月8日（金）

秋学期：令和4年12月5日（月）～ 12月16日（金）

実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙（参考資料2）を配布、実施した。回答用紙の回収については、院生が回収し、事務に提出することとした。

回答学生数

春学期：アンケート回収数10／履修者数（延べ人数）10（回収率100%）

秋学期：アンケート回収数5／履修者数（延べ人数）8（回収率63%）

実施結果

結果は次項からの記載内容の通りであるが、全般的にきわめて満足のいく結果を得ることができた。授業アンケート用紙は参考資料として掲載している。

4-2 教員の授業報告

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 吉野 剛弘

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育課題研究Ⅰ	春期	1	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学術的に意味のある研究というものがどのようなものなのかを理解する。 2. 修士論文のテーマ設定に向けて、関連分野も含めた幅広い知識を身に付ける。 	履修者の卒業論文の出来がよくなかったため、当人の卒業論文を素材に、先の到達目標に向けて授業を構成した。担当者としては十分に目標に到達したとは考えていないが、1名の学生のみを相手にした科目のため、履修者次第というのが実情である。
教育課題研究Ⅱ	秋期	1	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文のテーマを確定させ、研究計画を作成する。 2. 先行研究批判を通して、学術論文における独創性についての考え方を身に付ける。 3. 自らのテーマに合わせた研究技法を身に付ける。 	春期の授業（教育課題研究Ⅰ）を、履修者の卒業論文の出来がよくなかったために予定を大幅に変更したので、今期は修士論文執筆に向けた作業の基礎レベルに終始せざるを得ず、先の到達目標のうち2の一部しか達成できなかった。秋期終了段階で1年後の修士論文の提出がおぼつかないレベルにとどまったという点からも、担当者としては十分に目標に到達したとは考えていないが、1名の学生のみを相手にした科目のため、履修者に則するしかないというのが実情である。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 長友 大幸

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教材・環境開発演習	春期	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・教材や環境について研究することの重要性を感じていたことと現場に出たときに十分な内容を作れるよう演習を通して実践的に学びたいと感じたから。 ・教材研究を行い、教材への考えを深めるために履修しました。 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・小学校での教材研究の大切さなどに触れました。 ・保育、教育において教材や環境の重要性を再認識し、教材の研究や環境設定について、より深くそして色々な視点から十分に検討し、実践していたことが求められていることに気づいた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・十分に学びを得られた。 ・満足できました。 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・特になし。 ・ありません。 	<p>本授業を進めるにあたり、演習という性質上、学生に様々な材料体験をさせることを心掛けた。教材研究・教材開発として、身近なものをを用いた科学工作や、「科学を用いた調理法」と「室内園芸」について、また ICT を活用した授業展開にもつながる「ストップモーション」などを行った。また、それらに関わる模擬授業を計画・実践させ、教育現場で行った場合の様々な問題点や留意点などについて考察した。</p> <p>保育環境・学校環境など様々な視点から、教材の活用について理解を深めることをねらいとした。各教師と学生が話し合いを重ね、現場教育での教材開発の重要性について理解を深めた。チームティーチングであり、かつ学生が少数であるため、個々の活動に対して十分に時間を取り、指導ができたと考えられる。美術館や公共施設などに学生と共に足を運び、園や小学校との連携事業・教育普及についても学ぶことができる機会を多く提供した。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 長友 大幸

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの科学認識特論	秋期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもがもつ素朴概念と科学的概念を探る研究手法を獲得することができる。 ・科学的概念・自然認識を揺さぶり、意欲を伸ばす指導法を考えることができる。 ・理科教育, 科学教育に関わる文献や論文の検索の方法を習得し, 論文を収集できる。 	理科の授業実践に役立つ観察・実験を取り上げながら講義を進めた。また、授業展開がスムーズにできるよう、指導案の確認に力を入れた。
こども環境特論	秋期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 発達に応じた自然との係りの理解や, 自然体験・自然遊びなどへの展開を理解し, 教材を開発して教育実践することができる。 2. 身近な自然や生活と科学との係りの理解や, 科学体験・科学遊びなどへの展開を理解し, 教材を開発して教育実践することができる。 3. 環境問題の解決と持続可能な社会へ向けた教育(ESD)との係りを理解し, 広い視野で自然と子どもの係りを考えることができる。 	小学校での理科の授業実践を念頭に入れつつ、就学前の子どもにも役立つ観察・実験を取り上げながら講義を進めた。特に、科学体験や科学遊びを取り上げるとともに、市の科学館を訪問するなどして環境教育とのかかわりについて考えさせた。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 増南 太志

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
発達障害支援特論	秋期	2	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現在の教育における子どもの発達障害の現状について理解する。 2. 発達障害児の行動特性を学び、その行動を理論的に捉える視点を獲得する。 3. 発達障害の原因となる問題をとらえるためのアセスメントについて理解し、対応方法を探る視点を獲得する。 	<p>発達障害に関する理論やそれに関わる検査（WISC）について講義した後、発達障害に関わる論文講読を行った。</p> <p>論文講読においては、受講生の関心に基づき、また自身の研究に役立てられるように題材を選び、その内容について批判的に読みながらディスカッションを行った。</p> <p>例年のことではあるが、授業の目標と受講生の関心とを照らし合わせながら、適切な題材を選ぶことが課題である。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 森本 昭宏

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの造形表現特論	秋期	2名	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児期における造形表現の発達と実践について、そして保育者として子どもたちが意欲的な創造活動が行えるような指導法等について深く学びたいと考えたから。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 海外の子どもの様子や保育実践について教材を通して見て討論し、造形活動における子どもの主体的な保育についての見解を深めることが出来た。また、子どもの様々な表現方法や発想について考察・検討することで、保育者としての幅広い知識や考え方と応用力を有することの重要性を学び、そして自身の保育実践に活かすことが出来た。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 造形教育の在り方について深く学ぶことが出来、十分に満足できる内容であった。 <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特にございません。 	<p>学校・家庭・地域社会など、様々な芸術教育のあり方について深く学ぶとともに、造形の教育者として幅広い見識と応用力を身に付けることを目的として授業を組み立てた。特に造形活動と地域社会との連携について、多面的に考察した内容を授業の中で展開。智光山公園 こども動物園（狭山市市営）での親子を対象としたワークショップでは、学生主体で作品作りの環境設定と準備を計画的に行い 12 月に開催した。親子の対話から生まれる造形作品のあり方について、将来の造形の教育者として、実践的に学ぶ体験の場であった。また、ICT を活用したデジタル絵本や世界の幼児・児童画の紹介など、様々な造形表現について考察。直接作品に触れる機会を持たせた。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 准教授
氏 名 川喜田昌代
千崎 美恵

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
幼稚園教育実践演習	秋期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育・教育実践を実践的臨床的視点から保育・教育の現状と諸問題について学びを深めたいと考えたから。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らの研究内容と重なる部分があり、改めて自由保育や設定保育等の保育実践の概念整理や理解を十分に行うことが出来た。 また実際の保育現場でのデータ(逐語録等)を基に分析・考察をしたことで研究をする上での基礎的な知見や検討を学ぶことが出来た。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際の保育実践の場を見学し分析することが出来たことで十分に満足できた。 <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特にございません。 	<p>幼稚園での保育方法について、資料を通して知見を深めたうえで、実践の場（幼稚園）での実践の様子を見学・観察を行った。 見学先：十文字学園女子大学附属幼稚園 対応：伊集院理子園長 時間：9時から14時まで</p> <p>子どもの育ちや、マインドを大切にする保育とは、どのようなものか、また、子どもの主体性を尊重した保育の方法（自由保育）について、見学・観察を通して考察できるよう工夫した。</p> <p>子どもの主体性を尊重した保育（自由保育）の実践を見学を通して経験でき、新たな知見は広めることができた。</p> <p>時間的に、十分な考察ができなかったことが残念であるが、学生自身の基礎的な知識を積極的に学ぶ姿勢が、もっと欲しかったと思う。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 堀田 正央

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
多文化子ども教育特論	春期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科目名に興味を持ったため ・ 春期の授業は全て履修しようと思ったため。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外国の教育や保育についての論文にふれる機会を持てた。 ・ 「日本」だけでなく海外での視点もふまえて考えられるようになり、生活や環境により前提も違うという知識が身についた。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。とても満足しています。(複数回答)</p> <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし。 ・ ありません。 	<p>2名の履修者であり、少人数でディスカッションを行うことで一人ひとりの意見を掘り下げて検討しながら、グループダイナミズムを導くことに留意した。議論の前提としての知識や言説については教員から講義しつつ、原則的には学生一人ひとりの興味関心に従った文献を取り上げるようにすることで、主体的な授業参加に繋がったことと考える。</p>
教育課題研究 I	春期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文にむけた研究テーマを見出す。 2. 質的・量的な社会調査法および統計法を取得する。 3. 修士論文にむけた研究計画を立案する。 	<p>卒業論文を発展させる研究を企図していた当初計画に比べ、研究の背景を精査し新たな視点でテーマを検討することで、具体的なりサーチクエスチョンを導きながらより新規性・発展性を持ったテーマを見出し得たと考える。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 堀田 正央

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育課題研究Ⅲ	春期	1	※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載 1. 科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。 2. 先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。 3. 具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。	精緻な文献レビューを心掛け、先行研究と自身の研究の位置づけを明確にした上で質的・量的調査を行うことで、仮説検証に用いるに耐えるデータを取得することができた。今後の分析・考察により具体的な提言に繋がる論文が期待できる状況と考える。
特別課題研究Ⅱ	秋期	1	※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載 1. プレ調査を実施し、結果の検討から研究計画を修正する。 2. 本調査を実施し、仮説検証に向けた科学的なエビデンスを得る 3. 修士論文中間報告会にむけた報告書を作成する。	1名の履修者であり個別的な配慮に基づいた授業展開が可能であったと考える。本人の意欲が高く、多くの先行研究を参照できたことと裏腹に、到達目標にあるプレ調査を踏まえた具体的に構造化された本調査の計画を完成させるに至らず、今後よりスピーディーな進捗を期することが改善点と言える。
特別課題研究Ⅳ	秋期	1	※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載 1. 科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。 2. 先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。 3. 具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。	履修者は研究科初の留学生であり、日中英の3か国語を横断した授業となった。そのような状況から言語的な課題をクリアする時間的な余裕に配慮し、できるだけ調査のスケジュールを前倒ししたことが、却って緊張感を持ちながら弛まず修士論文作成に向き合うことに繋がったと考える。到達目標と照らしても論文の質は一定の評価ができる水準であったが、予定していた期間内の学会発表は行えておらず、データ分析の時間配分等を今後改善していった。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 専任講師
氏 名 石橋 優美

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育方法学特論	秋期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者として、子どもに対する教育方法について心理学等の研究分野の文献を基に、効果的な教育方法に対する現状や諸課題について分析・考察することが重要だと感じたから。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理学等の研究分野における分析や研究方法について知ること、そして文献を読解する力をつけることで自身の研究において参考にすることが出来た。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育方法に関わる疑問や論点について、対話形式での講義を行うことで多角的な視点から教育方法について分析・意見交換ができ有意義な議論が出来た為、大変学びになり満足できた。 <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特にございません。 	<p>本授業では、子どもに対する教育方法について、理論的な背景(特に発達心理学、教育心理学、教授学習心理学)から理解し、検討することを目的とした。近年の実証的研究に触れ、心理学の諸分野や心理学の教科教育への応用について学ぶとともに、それらを支える教育方法に関連する心理学等の知見について学んだ。</p> <p>授業において工夫した点は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達心理学研究、教育心理学研究、教授学習心理学研究のなかから、履修生自身が、興味・関心のある論文、研究テーマに即した論文を選び、履修生の研究にも役立てるようにした。 ・論文講読を通じて、科学論文の読み方、研究法について解説し、科学的に理解する力が身につくよう心がけた。 ・討議を通じて、効果的な教育方法に関する諸課題について分析し、考察を深めた。 <p>次年度以降も、履修生の興味・関心が履修生間で異なる場合にも、幅広い視野、多様な視点が獲得できるよう、講読する論文の選択は履修生自身に任せたいと考えている。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 佐内 信之

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
小学校授業実践演習	春期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の現場に出るための学びを井より深めるため。 ・必修科目であり、小学校での授業について知り、保育においてどのように生かすことが出来るかを学び、考え、見解を深めるため。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の内容で小学校について考えることが多いため、研究の尺度が広がりました。 ・教材研究の重要性や、子どもにどのように声掛け・発問をするかによって伝わり方や、理解度が大きく変わることを学ぶことが出来、子供の人的環境として教育者、保育者はどういった姿勢や専門性が求められているのか、今の自分に足りない力は何か考えることが出来た。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十分に満足できるものであり、学びになった。 ・満足です <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なし 	<p>学部での学習や教育実習での経験を踏まえて、より実践的な学びが深まるように心掛けた授業を構成しました。具体的には「模擬授業」を通した学びです。前半は担当教員が模擬授業を行った上で、対話的な検討を通して、授業に対する見方・考え方を学びます。後半は受講者全員が模擬授業を行った上で、それぞれの課題を踏まえて、より改善した授業を再提案します。今回の経験を通して、小学校の授業実践について、今後も考察し続けてくれることを期待しています。</p>
子どもの言葉特論 (幼稚園)	春期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <p>乳児期の非言語コミュニケーションから幼児期の話し言葉、学童期の書き言葉まで、さまざまな言語発達の理論を取り上げる。そのために、本授業では原則、各回にテキストの1章を購読する。最後に、受講者が選んだテーマによる発表を行う。</p>	<p>乳幼児における言語の発達から学童期における読み書きの発達まで、テキストにしたがって購読を行った。ただし、履修者が1名のため、院生同士の議論ができない。そのため、教員も発表資料を作成し、意見交換を行った。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 佐内 信之

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの言葉特論 (小学校)	春期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <p>話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、言語事項における、さまざまな言語活動の実際を取り上げる。そのために、本授業では原則、各回にテキストの1章を購読する。最後に、受講者が選んだテーマによる発表を行う。</p>	<p>話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、言語事項における、さまざまな言語活動を実際に体験した。ただし、履修者が1名のため、院生同士の活動ができない。そのため、教員も活動に参加して、交互に発表を行った。</p>
教育課題研究Ⅲ	春期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <p>自分の「問題意識」を精緻化し、「課題意識」を明確化できるような「研究計画」に従って、独創性を発揮した修士論文の完成をめざして研究に取り組む。</p>	<p>中間報告会に向けて、準備を行った。特に、「情報モラル」に関する教科書教材の収集・分析を行った。ただし、履修者が1名のため、院生同士の議論ができない。そのため、教員も同一の教材に目を通した上で発表資料を作成し、意見交換を行った。</p>
教育課題研究Ⅳ	秋期	1	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <p>自分の「問題意識」を精緻化し、「課題意識」を明確化できるような「研究計画」に従って、独創性を発揮した修士論文の完成をめざして研究に取り組む。</p>	<p>院生の課題意識に基づき、修士論文の執筆・修正検討を行った。特に、「小学校教科書の情報モラル教材」に関する先行文献を可能な限り収集した。履修者が1名のため、院生同士の議論ができない。そのため、教員も先行文献の収集に協力して、それぞれが集めた文献を読み合いながら意見交換を行った。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 准教授
氏 名 堀田 諭

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもと道徳特論	秋期	1名	<p>※授業アンケート未実施科目の為、授業到達目標を記載</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 近年の学校教育における道徳授業の意義と課題について、事例を挙げて説明することができる。 ・ 哲学教育に関する文献報告を通して、対話空間を構築することができる。 ・ 本授業全体を踏まえて、これからの道徳教育を成立させる条件について説明することができる。 	<p>講義の前半で、現在の道徳授業に関する教育改革の動向を確認し、これまでの道徳授業の特質とこれからの道徳授業の方向性について、具体的な授業を通して検討した。これからの道徳教育の成立条件を考えていく上で、とりわけ意欲的な実践を行う教師の在り方・在り様について、文献報告及びそれに関する議論・対話を通して検討した。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 講 師
氏 名 千 崎 美 恵

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子ども発達特論	春期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達をどの視点からアプローチしていくのかを学びたくて履修しました。 ・保育者になる為にまた子どもについて研究する中で、子供の発達についての学びを深めることが重要だと感じたから。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの論文に目を通す機会をいただいたので、研究の幅が広がった。 ・自身の関心や研究テーマに沿って論文購読したことで、研究における自身の考え方や関心についてまとめられ、また違った視点や発達から考えることが出来たことで視野が広がった。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十分満足できるものであり、毎時間多くの学びを得ることが出来た。 ・すごく学びがあり、満足させていただきました。 <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特にありません (複数回答)。 	<p>子どもの発達を多角的に捉える視点を持って深く理解することを目的とした。さらに、各自が探求するテーマの問題と目的への道筋の構築を意識して展開させた。</p> <p>そのために、発達心理学の主要な発達理論を概観した後、それぞれの研究テーマに関する論文購読を行った。各自が問題意識を持った論文を提示してレジュメを作成、授業内で発表し、ディスカッションを通して、研究テーマの背景要因と問題意識を明確化していった。</p> <p>そのプロセスを繰り返すことにより、本授業の具体的目的である1. 子どもの発達に関する主要理論や概念を理解する。2. 子どもの発達過程とそれに影響を与える要因を理解する。3. 現代の子どもを取り巻く発達に関わる問題を理解し、分析する視点を獲得する。</p> <p>4. 子どもの発達を支えるための発達支援の方法を探る視点を獲得する。について達成できたと考える。</p> <p>ディスカッション形式で学びを深めたため、幼児教育、小学校教育に関するそれぞれの現状、課題、支援等についての考えを深めて共有でき、さらに、幼保小連携の重要性、問題点、援助方法についても理解を深めることができたと考える。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 客員教授
氏 名 葉養 正明

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
学校マネジメント特論	春期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校へのマネジメントについて学びたく履修しました。 ・ 幼稚園教諭先週免許において、必要な資質、能力について幼稚園要領の理解から学び、小学校との連携を見据えた教育・保育についての視野を広げる為。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校へのアプローチの仕方など。 ・ 保育・教育についての法律や制度、現状を理解することで今ある改善点に目を向けることが出来た。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 満足です。(複数回答) <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし (複数回答) 	<p>受講生に限られているため、初回授業でどのような進路を考えているかを伺うようにしている。</p> <p>今回は、一人は小学校教員、他は保育士志望であったので、保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領を教材に使いながら、カリキュラム・マネジメントという概念やその具体化について学習を進めることに力点を置いてきた。</p> <p>そこで、教材としては、教職六法を無償で配布し、法令上の確認ができるように授業を進めた。教職六法は、毎回持参をお願いしてきた。</p> <p>さらに、授業一週間前には授業でなにをテーマとするか、教材は何を用いるか、二人のメールに送り、当日には、メールで使用予定を連絡した教材を印刷し、手渡す形をとった。</p> <p>幼稚園実習、東京都教員採用試験を授業期間中にはさんでいたが、それらとの緊密な関係を考えながら授業課題を設定してきた点では、今回の授業は受講生二人のニーズに十分に対応できるものになったと思う。</p> <p>シラバスへの記載は、受講生のニーズに対応して柔軟に扱うことが重要であると、あらためて思った。</p>

5 研究発表会及び意見交換会

大学院担当教員相互の研究交流を図るとともに、学生及び教員との意見交換の場を設け、今後の大学院の教育研究活動の活性化に資することを目的として次の研究発表会及び意見交換会を実施した。

5 - 1 研究発表会

日 時：令和4年9月7日(水) 11:00～12:00

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 404 教室

参加者数：15名(専任教員11名、客員教員1名、大学院生3名)

内 容： 発表者：千崎 美恵 子ども教育学研究科 講師

テーマ：「乳幼児を持つ父親・母親の被養育経験が虐待不安に及ぼす影響」

5 - 2 大学院専任教員と大学院生による意見交換会

日 時：令和4年10月26日(水) 13:00～14:10

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 311 教室

参加者数：13名(専任教員9名、客員教員1名、大学院生3名)

内 容：

主な意見

- ・ 院生室にパソコンが設置され、勉強する環境が充実し、不自由していることはなくなった。
- ・ 少人数での受講をいかし、院生同士の学び合いを意識して講義を進めていた。
- ・ 留学生の入学により、他の院生の学びにもよい刺激となっている。

5 - 3 専任教員と客員教員による意見交換会

日 時：令和4年10月26日(水) 14:10～14:40

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 311 教室

参加者数：10名(専任教員9名、客員教員1名)

内 容：

主な意見

- ・ 院生が幼稚園を主とするか小学校を主とするかどうかで、主指導教員と副指導教員がほぼ決まってしまう状態であり、選択肢がない。
- ・ 院生を指導するにあたり、専門的な内容を学習させたいが、どこまでを求めるかが難しい。

6 論文審査について

本大学院子ども教育学研究科では、修士論文作成過程において、2年次に2回の中間報告会を実施することとしている。各個別報告の詳細は次の通りである。

6-1 修士論文中間報告会

第1回修士論文中間報告会

日 時：令和4年5月26日（木）12：10～13：00

場 所：埼玉学園大学3号館 301教室

【第1回修士論文中間報告会】

時間	内容（1人当りの発表10分・質疑10分）	
	発表者	指導教員名
12：10～12：15	研究科長挨拶	
12：15～12：35	21MC0001 何 晨陽	堀田 正央
12：35～12：55	21MC0002 小関 隼斗	佐内 信之
12：55～13：00	講 評	

第2回修士論文中間報告会

日 時：令和4年10月27日（木）12：10～13：00

場 所：埼玉学園大学3号館 304教室

【第2回修士論文中間報告会】

時間	内容（1人当りの発表10分・質疑10分）	
	発表者	指導教員名
12：10～12：15	研究科長挨拶	
12：15～12：35	21MC0001 何 晨陽	堀田 正央
12：35～12：55	21MC0002 小関 隼斗	佐内 信之
12：55～13：00	講 評	

6-2 学位論文発表会及び最終試験

実施日：令和4年2月10日（木）

学位論文発表会

時間：13：00～13：40

場所：埼玉学園大学3号館 304教室

【学位論文発表会】（1人当たり発表20分）

時間	発表者	指導教員名	修士論文題目
13：00～13：20	21MC0001 何 晨陽	堀田 正央	外国人の子供における幼稚園・保育園と家庭との連携のデジタル化 —日本で中国人の子どもを着目して—
13：20～13：40	21MC0002 小関 隼斗	佐内 信之	小学校「特別の教科 道徳」の検定済教科書における情報モラル 教材の特徴分析

最終試験（口述）

時間：14：00～14：40

場所：埼玉学園大学3号館 312教室

【最終試験】（口述）

時間	氏名
14：00～14：20	21MC0001 何 晨陽
14：20～14：40	21MC0002 小関 隼斗

7 おわりに(今後にむけて)

令和4年度は、令和3年度のFD活動の報告をもとに、さらなる検討を加えた。先に掲げた各授業の担当教員による「教員の授業報告」及び「大学院専任教員と大学院生による意見交換会」「大学院専任教員による意見交換会」により、院生と各科目担当教員、担当教員同士の話し合いをもとにした授業の振り返りによれば、「教育の理論と実践を往還しながら、自らの教育実践理論を構築できる資質と力量」の育成を目指した大学院教育が実施できたと評価できる。また、一期生は、卒業後、修士論文を発展させ、学会においても発表を行っていることも、本研究科における学びの成果である。

今後も、客員教員を含め大学院担当教員は、将来スクールリーダーとして活躍できる高度な専門的知識と技術を修得した人材養成が目指す大学院教育の在り方を研究し、実践していく所存である。

埼玉学園大学大学院FD委員会規程

平成22年 5月12日制定

(目的及び設置)

第 1 条 本大学院に、授業内容及び教育方法を改善し、その質的充実を図るとともに、教員の教育力の向上に資すること（Faculty Development。以下「FD」という。）を目的とし、FD委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任 務)

第 2 条 委員会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について組織的な推進を図ることを任務とする。

- (1) FD活動の企画立案に関すること
- (2) FD活動に関する情報収集及び提供に関すること
- (3) FD活動についての評価及び報告書の作成に関すること
- (4) 学長の諮問した事項に関すること
- (5) その他大学院のFDの推進に関すること

(組 織)

第 3 条 委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 研究科長
- (2) 専攻主任
- (3) 専任教員のうち、研究科委員会より選出された教員 若干名

(任 期)

第 4 条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員長は研究科委員会の議を経て、学長が指名する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(会 議)

第 6 条 会議は、過半数の委員の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

2 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第 7 条 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事 務)

第 8 条 委員会の事務は、事務局教務課において処理する。

附 則

1 この規程は、平成22年4月1日から施行する。

2 この規程施行後、最初に就任する委員の任期は、第4条の規定にかかわらず平成23年3月31日までとする。

大学院子ども教育学研究科
授業担当教員 各位

大学院子ども教育学研究科
FD委員長 堀田 正央

学生向け授業に関するアンケート実施のお願い

埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科の授業につきましては、日頃より格別のご指導、ご配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。

令和〇年度〇期の授業アンケートを下記のとおり実施することとなりました。

つきましては、アンケート実施の趣旨をご理解いただき、実施していただきたく、ここにお願い申し上げます。

ご負担をおかけいたしますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

記

1. 実施期間 令和〇年〇月〇日～令和〇年〇月〇日
2. 対象授業 講義科目、研究指導科目
3. 実施・回収
 - ・アンケートの実施科目は、履修者が2名以上の講義科目及び研究指導科目を対象とする。
 - ・担当教員は所定のアンケート用紙（人数分）及び回収袋（1袋）を授業終了前の10～20分に配布する。
 - ・担当教員は回収袋にあらかじめ実施日・授業担当者を記入する。
 - ・アンケート実施後、学生自身がアンケートを回収袋に直接入れ、最後の学生に封をするよう指示をする。
 - ・封をした学生に教務課へ提出するよう指示をする。
4. 授業アンケート結果の活用
授業アンケートは集計し、FD活動報告書に掲載する。

以上

参考資料4

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名
氏 名

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、 改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)

参考資料5

中間報告会の振り返り

埼玉学園大学大学院 子ども教育研究科

学生番号	氏名	指導教員名
中間報告会までの準備を振り返ってどのような点が反省点としてあげられますか		
論文指導についての意見は何かありますか		
中間報告会での各教員からのアドバイスは、今後の論文作成において、どのように参考になりましたか。		

※書ききれない場合は、行数を増やしていただいて構いません。